

萩原朔太郎記念

水と緑と詩のまち

前橋文学館報

No.29 2008.3



「とげ抜き」

伊藤 比呂美

平成十九年十月二十八日、文学館三階ホールにおいて第15回萩原朔太郎賞贈呈式及び記念イベントが開催され、受賞された詩人の伊藤比呂美氏による講演が行われました。

先ほどのマンドリン、すばらしかつたです。なかでも「あんたがたどこさ」を弾いていただいて。熊本が、生活の基盤の一つです。

あれは熊本の歌ですね。うちのそばに船場橋というのがあって、そこに狸の銅像がちゃんと建っています。そういうところから來ました。

のつけからすごくアットホームな感じでうれしいです。遠くからわたしの知人、友人、駆けつけてくださつて。一番遠いのが、カリフォルニアの友達のかおりさん。カリフォルニアで同じように外人の夫を持ち、異国で苦労している仲間です。戦友と言つてもいいかもしだれない。たまたま前橋のご出身なのでお父さま、お母さま、といつしょに来てくださつてます。

こちらにはわたしの前の前の夫の上司、社長でしたか、(萩原)朔美さん。若いときにお会いしましたねえ。社員慰労会かなんかで、どつかの飲み屋で、上司か社長ですからね、固くなつて

お会いしました。今日は再会できて、こんなうれしいことはございません。

熊本からも、日々、苦楽を共にしている仲間が来てくれまして。非常にアットホームな感じで。

根本的に、根無し草でござります。もともと東京の生まれ育ちでした。このままずつと東京にいるのかなと思つてたら、ひよんなことで熊本に行くことになりまして、熊本行つたなと思つたら、今度ボーランドへ行きまして、ボーランドへ行つたかなと思つたら、また熊本へ帰りまして。そんなことしてるうちに東京に新しい地下鉄がいっぱいてきて。東京に帰つたつて、町の様子も見慣れなくなり、どこにどうして行くのやら見当もつかなくなり、そうこうして いるうちに、諸般の事情、好んでしまったことではないんですけれども、アメリカに移り住んでしまいました。ほんとにどこがほんとの居場所なのか、すっかりわか

んなくなつてしまひました。

朔太郎

ここに来る前にうちの母、もう一年間も寝たきりなんですねけれども、「群馬の前橋に行くんだよ」って言いましたら、「お墓がある」と言うんですね。聞いてみますと、なんと、母方の祖父の、生まれ故郷が、群馬県の境ということだと。そういえばと、こう記憶をたどりおこしてみますと、子どものときに一度、おじいちゃんの死んだ後、連れてこられたことがあります。先ほども市長さんに、「昔来ました、群馬県。叔父の車で来て、道端で買った漬け物のナスが、すごくおいしかったんですよ」って、覚えているのはそれだけなんですけれども、申し上げたら、「や、それはきっと埼玉県でしょう」っておっしゃるんですね。残念なことに。だから、わたし、「ナス買つてくるからね」つて母に約束して来たんですけども、買わずに帰ります。

そういうわけで根無し草っていうのもいいことがあって、どこも自分のうちじゃないかわり、どこにも自分の居場所が作れる、といいますか。ちょうど自分の生き方が一番似ているものはといいますと、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、セイタカアワダチソウなどという帰化植物。人に好かれず、必要ともされず、どこかから風に吹かれてやつて来て、着々と、育ち、増え、ひろがり、ああいうものはまるでわたしなんじやないかって思うこともあります。それはそれで楽しい人生だと思つているんですけれども。

わたしは高校のときにまず中也から詩に入りました、それまではもうマンガひとつすじ、今でも実はマンガひとつすじなんですけれども、マンガしか読まない詩人、というので嫌がられていました、業界では(笑)。ところが高校のときに、中也を読みまして、それで打ちのめされまして、しばらく中也しか読まないで、それからしばらくしてから、朔太郎に目をむけて、のめりこみました。

中也と朔太郎に共通したことが一つあります。二人とも、落第しております。で、そこに、わたしもまず影響を受けまして、中也・朔太郎を読み始めてから、わたしの成績は地に落ちました。で、かつかつ大学に入り、かつかつ卒業しましたけど、詩人というのは勉強はしないもんだという、そういうスリロミされたのが、中也・朔太郎でした。

どの詩に一番影響を受けたか。さつき読み返してみましたら、やつぱりこれでございます。ちょっとと読ましてください。

3

蛙の死

蛙が殺された、

子供がまるくなつて手をあげた、

みんないつしよに、

かはゆらしい、

血だらけの手をあげた、

月が出た、

丘の上に人が立つてゐる。

帽子の下に顔がある。

(『月に吠える』より)

ね (笑)。

今でも月が出ますと、みんないつしよに、かわゆらしい、血だらけの手を上げたくなります。詩つていうのは、この、体の、奥そこ一のほうに、こう残っています。十五、十六の、子どもとのときに読んだ詩ですから特にそうですね。

次に好きな詩は……。だいたいわたしは、よくいる、いたつてありきたりな文学少女だったのですから、朔太郎、中也、あと賢治。詩で知つてたのはそれだけという、なんですか、メジャーどころをゲットしておけ、みたいな。

ええ、アメリカ暮らし長いもんですからね、ときどき英語弁が入りますので、どうぞお気になさらず (笑)。

ふらんすへ行きたしと思へども

他に何も知らないで、大学入つてしまらーくして、自分も詩を書き始めてから、大学の友達に現代詩というのを教わりました。あのときは、驚いた。こんな世界があるのか、って。全然違うじゃん、読んでもわかんないじゃんこれ、って。

ですから、近代詩から現代詩すつ飛びして自分に来ちゃつたようなものなんですけれども。現代詩を読みはじめたら、ま、こんな面白い世界はありませんでした。これはまたあとで。

もう一つ読まして。「ふらんすへ行きたしと思へども」。やつぱりこれが頭の中に入つてまして、「アメリカに行きたしと思へども」とか、「前橋へ行きたしと思へども」とかね、どこか行くとき、必ず頭の中でパロディしないと気がすまないんです

「フランス」が「ふらんす」と、ひらがなで書いてある、こがまだ好きでして。この「ふ」が、ひらがなで書かれると、かたかなで書かれるのと、全然「ふ」らしさが違います。そう思いません? 「フ」じゃなく「ふ」つてありますと、こう、ふくよかなおなかのような、人体にどんどん近づくような。「ふらんす」っていう国の持つているイメージが、どんどん、どんどん、人体の、女の肉体の、感じになつてきますねえ。そんな感じでこの詩を読んでました。

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広をきて
きままなる旅にいでてみん。

汽車が山道をゆくとき

みづいろの窓によりかかりて

われひとりうれしきことをおもはむ

五月の朝のしののめ

うら若草のもえいづる心まかせに。

(『旅上』『純情小曲集』より)

で、なんんですけど、何よりもやはり、影響を受けたといいま
すと、やっぱこれなんですね。このリズムには、ほんとに影響
を受けました。なんでこんなことが人間にできるんだろうと思
うようなリズム。これはもう朔太郎だけ。中也にはなく、賢治
にもなく。この畳みかけるような、工音で終わる、終わりつづ
ける。これですね。そう、あれです。

根がしだいにほそらみ、
根の先より纖毛が生え、
かすかにけぶる纖毛が生え、
かすかにふるへ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まつしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりんと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

みよすべての罪はするされたり、

されどすべては我にあらざりき、
まことにわれに現はれしは、
かげなき青き炎の幻影のみ、

雪の上に消えざる哀傷の幽靈のみ、
ああかかる日のせつなる懺悔をも何かせむ、
すべては青きほのほの幻影のみ。

竹

光る地面に竹が生え、

青竹が生え、

地下には竹の根が生え、

(『月に吠える』より)

おそまつさまでした。

運命の出会い

そういうわけで、今日は、（高橋）源一郎さん（萩原朔太郎賞選考委員）がいらっしゃいません。たぶん源一郎さんがこれをお話しになるんだろうと思つていたことを、やつぱりちょっと話さなくちや、と思つております。

これ（受賞作『とげ抜き 新巣鴨地蔵縁起』）は詩か小説か、という問題でございます。まず最初に申しあげておきたいのはですね、これは、最初から詩を書くつもりでおりました。ちょうど雑誌の「群像」から、連載のお話いただいたときです。

わたしが今、詩といつているのは、現代詩という分野です。詩といつても広うございます。詩の中には近代詩があり、それから世間で詩といいますと、なんかちょっとこう、聞いてすぐわかるような、なんとかみつをとか、そんなようなのがありますわね。あれをも詩といいうんですが、わたしたちの表現しているのは、戦後詩ともいいまして、うう、戦後詩。まあ、そのへんは割愛いたしますので、あとで勉強してください、実はお話をしたくてわかんないんで、あんまり読んでない。ただ戦後詩とは、男たちが戦争から帰つてきて、絶望して始めた詩というのは聞いておりますね。おおもとをたどれば、西洋の詩の影

響を受けて、明治期にはじまつた新体詩とか、そういうことになりますが、そのあと、朔太郎だ、中也だ、白秋だ、賢治だ、順不同ですが、そういう詩が出てきまして、そして戦後になって、「荒地」のような詩人たちが書きはじめた。それが戦後詩、あるいは現代詩と申します。わたしは、紹介されるときにやはり、現代詩の、詩人でございます、と言つておりますけれども。何から話せばいいのやら。わたしは用意をまったくしないので有名で、詩壇の志ん生と呼ばれています（笑）。今日もね、何の用意もしてこないで、ここでしゃべっているんで、話がだんだんおかしいところにいくかもしませんけれども。

大学の頃、日本文学学校という、今でいうとカルチャーセンターみたいなところに行きました、文学の講座を取つたんですけども。全然詩をやるつもりはなかつた。行つた。そしたら講師の一人が詩人で、生きた詩人、初めて見ました。まあ、それがですね、頭から後光が出ているようないい男だつたんです。わあ、いい男だわあ、これなら詩が書けるわあ、と思いまして、その方の指導のもとで詩を書き始めました。あとで覚めた目でよく見たら、えー、とくべつ美男子というわけでもなく（笑）。なんか運命の出会いがあつたんでしょう、ばあつと、こう、後光がさしてるように見えました。それで詩を書き始めたわけですから。

詩を書き始めて、少しずつ現代詩っていうものを知つてみると

と、読まない読まないと言つときながら、やつぱりプロですか
ら、最小限度は読んでおります。最小限度読んだものから鑑み
るにですね、これはすばらしい分野ではないか、なんでもあり
なんではないか、つていう気が十八、九のころにしたんですね。
小説つていうのは、長いです。言葉がずうつと続きます。人が、
どうして、こうして、さあどうなるか、つていう話がなくちゃ
だめなんです。

詩は、それ、な
くていいんです
よ。で、小説は、
事件があつて、
時間が経つてい
かなくちやいけ
ない。詩は、そ
れもなくていい
んですね。まあ、
詩はとりあえず
行分けで、余白
がいっぱいある
ことになつてしま
すが、散文詩つ
ていうのもあり



ますから、そうでなくともいいわけですよ。
そのいろいろなものに興味を持ちまして、現代文学、現代
音楽、現代美術、何を見ても、なんかこう通底するものがあ
る。つまり現代詩つていうのは、わたしたちは詩としての言語
を使つてあるだけで、現代の表現である。なんでもできる、と。
なんでもありの世界だ。なんでも表現できる。どんな形でも。
これが現代詩だと思つてました。

現代詩という名の伝統詩

それからずつと書いてましたが、ある時点、十数年前なんで
すけれども、やんなつちやいまして。やんなつちやった理由、つ
ていうのは自分にあつたんです。何を書いても、書いても、書
いても、書いても、詩になつた。その時点で、もう十何年詩を
書いてましたから、書き慣れてました。才能あるんですよね、
わたし（笑）。いくらでも詩が書ける。なんでも書ける。で、
何を書いても自分で、と。

これが、やはり、大きな問題でした。書くでしよう。で、書
けたつと思つて、見る。同じじやん、前のと。もちろん違つて
ましたよ。一所懸命違わして書いてたんですけど、このよ
うに、大きな声をしておりますので、何を書いても全部同じ、
のような気がする。少なくとも「伊藤比呂美」にはなる、と。

全部「伊藤比呂美」である。

「現代詩手帖」という業界誌がございます。その頃、それに載つての詩を見てますと、みんな詩でした。どれもこれも。若い頃、あんなに心をふるわせた、なんでもできる、わたしたちなんでも、どんなところにも踏み込んでいける、どんな羽目もはずせる、と思ってたこの分野が、ですね、はつと気がついたら、どの人も、どの人も、どの人も、詩らしいものを書いている、と。これは、現代詩、これは前衛という現代の表現でなくちゃならないのに、前衛という名の伝統詩ではないか、と。

わたしらの分野の、いとことか、親戚のおばさんみたいな方たちで、俳句があり、短歌がありますね。かれらも自分のことを大きな意味で、詩と称しています。で、そのとき、あっちの世界に近いんじゃないか、つていうような気がしたんですね。いえ、現代短歌、現代俳句の人たちは、なにを一つ怒つてくれと思うんです。わたしが今言つたのは、伝統としての、あれですね。で、伝統詩になつてしまつては、わたしがやりたかったことではない、と。

前衛とは、じゃあ、何なのかといいますと、結局「何でもあり」なんじゃないかと思うんです。「何でもあり」の中で、何をし

たかつたのかというと、うーん、そこが難しいんですが、自分がわからない何か、だと思うんです。

自分が今まで見たこともない表現。

唯一、そこに、制約がありまして、それは何かといいますと、言語を使う、っていうことです。わたしたちは、言語以外のものは使わないんです。音を使つたらそれは現代音楽になり、絵の具とか、土くれとか、コンクリかなんか使つたら、それは現代美術になると思うんですけども、わたしたちは言語を使うんです。言語を使って、今まで見たこともないところに踏み込んでいく。これができたら、また、次に踏み込んでいく。これが現代詩だとわたしは理解していました。

で、詩を書くのはすつごくうまくなつたけれども、前に踏み込んだところに、また来ちゃつた。あ、また、来ちゃつた。ここ、知つてる。見たことある、と。そういう自分を見いだしたとき、ええい、こんなものはやつてられるか、と。飲んだくれたおとうさんがうちに帰つてきて、があーつてちやぶ台ひつくり返したみたいに、いやになつちゃつて、何もかも放り投げて、やぶれかぶれになつて、詩から遠ざかつてしましました。

経済格差じやない何か

その頃、詩も行き詰まつてましたが生活にも行き詰まつてしまつて。もう、波乱万丈の海千山千(笑)。前々夫とはとつぐに別れ、前夫とも別れ、それからなんかいろいろ縁があつて、アメリカに行きました。アメリカに行くときに、前の夫と別れて、子

ども三人連れてつたもんですから、お金がかかる。養育費もらつてたんですけれどもね、足りませんよ。これは困ったなと思つて、やっぱり、お金がほしい、と。

ほんとにわたしら詩人と申しまして、なんですか、八百屋さんが大根売るように詩を売り、お百姓さんが大根作るよう詩を書いております。つまりわたしたちが書いてそれを作つて、それを売つて、それで生活している。これがプロの詩人なんですね。一編書いたらいくらもらえるか。知らない方がほとんどだと思いますが、まあ、よくて、五千円。一編の詩を書くのに、ひどいときにはひと月以上かかります。ひと月がんばつて働いて五千円。

子ども三人。夫はいない。どうしたらしいのか。そのとき思つたのが、そうだ小説を書けばいい、と。一編でだいたい二、三十分は書けますわね。だいたい五千円にしても、計算して暮らしていくかも（笑）、と思いまして、ようし、と決意しまして、小説の編集者に会つて「わたしこれからがんばつて小説書きますから」って言いまして。小説をやるつもりでおりました。そのときはもう、まったく詩には未練はなかつたんです。

で、小説始めたところがね、やっぱり才能っていうのが大切です（笑）。詩にはこんなに才能があるのに、小説にはまったく才能がなかつたんですね。文章書く才能はありますから、いくらでも書けるんですが、それは小説にはならなかつた。どん

なにやつても、どんなにやつても、それは小説にはならなかつた。

不思議なことがございまして、詩人はよくリクルートされて小説家になるんですけども、小説家がリクルートされて詩人になつた話は一度も聞かない。そこにはこう、経済格差のようなものが、ふかーくあつて、詩人としてはむかつくんですけれども。でも、やはりそこには何か、経済格差だけじゃない違ひが、あると思うんです。

小説の編集者の方々や評論家の方々に、さんざん、言われました。たとえば時間がたつてない、とかね。人が動いてない、とかね。この人の、バックグラウンドがわからない、とかね。全部、言われば「はい、ごもつともでございます。」つていふことなんですが。

それでしようがない、それを書こうと思つて一所懸命やつてみたんですけど、できないんです、これが。無い袖は振れないっていうやつですかね。無い袖は振れないってことに気がつかないで、何年間か苦労してましたけれども、とうとう、あるとき、ま、いろんな理由が重なりまして、詩に、里心がついちゃつた。小説の中に詩的なところが混じりますと、とっても嫌がられるんです。それが、欠点として受け止められる。小説つていうのは、最初の一行為と次の行為が、地面の上を歩いているように続くんですね。地道に、納得のいく、続き方をしていくわけで

すよ。ところが詩つていうのはね、飛ぶんですね。行から行へ、こう、ひよん、ひよん、と、飛ぶんですよ。小説を書いていても、その飛ばしかたを、どうしてもわたしはしてしまう。地上に足をつけなければ、小説らしく書かなければ、と、いつもどこかで言われているような気がする。編集者の方は、何でも書いていいんですよ、つて皆さんおっしゃるんですけども、結果としてそういうメッセージを、有形無形に受ける。評論家はもちろんそういうことをがんがん言つてくる。この人は、小説をちゃんとやる気がない、みたいなことも言われる。

説経節を作りたい

やつぱり人つていうのは、ほめられないとつまらないものにして。つらつら思つたのは、わたしは、詩を書いていたときは、あんなに、あんなにも才能があつた、と。このままわたしは、小説を書き続け、金になると思つていたらろくな金にもならず、このまま、あたら才能をつまんない小説書いて終わらせてしまふのかと思って、とうとう詩の世界に戻りまして。「もう小説はやめたー」って大声で叫んで、小説で書こうとしていたネタをぜんぶぶちこんで、書き上げたのが前作の『河原荒草』です。十三年ぐらいブランクがありました。

もはや十三年前に、やめた状態に、やめた地点に、帰るつも

りは毛頭ありませんでした。いわゆる「現代詩」です。「詩」には帰りたいが、「現代詩」の世界に帰るつもりは毛頭なかつたんです。その「現代詩」を特徴づけているのが、いわゆる「現代詩」の技巧ですよ。一見したところ何を言つているかわからぬ、一所懸命考えるとややわかつてくる。読み違いがあるかも知れない。あつても誰も文句を言わない。勝手に好きなところだけ取つて読める。しかし頭には残らない、という。これが「現代詩」と思つてます。それを繰り返すつもりは、まったくなかつたんですね。

じゃあ何をしようかって思つたときに、わたしの心の中に、長いことあつたのは、説経節つていうものです。これは中世の、古典です。語りです。近松の淨瑠璃とかございますね、あれのすごいく古い形です。

わたしがなぜこれにそんなにひかれたか。だいたい昔から古いものが好きだつたんです。高校のときは、中也・朔太郎の薫陶を受けてますから、勉強はしないものと決めておりまして。それでも、古文だけはなぜか好きでしたねえ。

ところが学校で読む古文つていうのは、中古がだいたい中心で、貴族が、あはれやをかしの世界に生きている。趣味的で、奥ゆかしくて、奥歯にものがはさまったようで。一歩踏み込めばおもしろいものは、いやらしいものも、どうどろしたものも、獵奇的なものも、いくらでもあつたのに、それを知らなかつた。

で、おとなになつてから、ふと出会つたのが、説経節。

語り物です。近松の、あの淨瑠璃、それはもう皆さんが存知と思いますが、あのリズムがあつて、もつと泥臭くつて力強い。しかもそれを語つて歩いていたのは、ごくごく底辺の女で、村から村へ、戸から戸へ、つていう感じで、放浪して語つて歩いていた。はした金をもらい、あるいは食べ物をもらい、あるいは春をひさいだりして、暮らしていたわけですよね。

しかもその語られるお話が、女が主体なんです。もちろん、主人公は男。ものすごくかっこいい男で、高貴で、強くて、なんでもできて、ものすごい美形で。それがですね、あつという間に落ちぶれて、どうしようもない状態になる。死んでよみがえつて、人間以下の存在になつてしまつたり、病気になつて何もできなくなつたり。ところが、女が強い。お姫様なんだけど、みんな強い。なりふり構わず、落ちぶれて、その、何にもできない男たちを引っ張つて、あるいは肩に抱えて、人生を生き抜いていく、つていう話なんです。

それを読んだときにですね、もうすでにそのころは、何回か離婚結婚を繰り返しておりますけど、ここに出てくる男つて、わたしの今まで観察してきた男たちにそつくりじゃん（笑）。一見かつこいいけど、実はなんにもできない。で、女は、わたし自身にそつくりじゃん。苦労ばかりだけど、よく働く、必死でがんばる（笑）。だからこれを何とかして、自分の文学に、

ぽんとう、はめ込もうと思つたんですね。

実は今までずうつとやつてきました、それを。まだ、まじめに詩を書いていたころから。『わたしはあんじゅひめ子である』とか、『家族アート』であるとか、『ラニーニヤ』であるとか。詩でも小説でも。それから前作の『河原荒草』もそう。どれもこれも、説経節をとりあえず母体にして、その上に自分の詩を作つた。で、今回、そういうわけで、詩を再開するにあたり、それをさらにつきつめたい。

伊藤比呂美。女。詩人。今まで生きてきたんだつたら、ここで、やつぱり自分自身の詩を作りたい、自分自身の境界を超えてい、今まで知らなかつたことをやりたい。もう若くないんで、言語の実験なんかやりたくない。だつたら何がやりたいか、といふと、説経節を作りたい、と思つたんですね。昔の話をそのままやつても、それはただの古典です。そんなんじゃなく、切れぱ血が出るような、今の説経節を作りたい、と思つたんです。

そんなとき、「群像」から、「詩でもいいですよ」つて言われて。その前に、「わたしは小説はもう書きません」と、大きな声で宣言したもんですからね。「ほんとに詩を書いていいんですか。詩ですよ」つて言いましたら、「いいですよ。」つて言つてくれますって。「ほんとですか」「ほんとです」つて。

今まで、文芸誌で詩の扱いつていうのは最低でした。こう、雑誌を開くと最初のページに、巻頭詩なんていつてね、このぐ

詩か詩じゃないか

らい。まるでイラストですよ。「文藝春秋」にも詩があるんですけれども、俳句が、八句ぐらいありますね。短歌も、まあ、八首ぐらいあるんです。で、詩も、同じくらい、十行で書くようについて依頼がくる。ほんとに、イラストです。不満でした、これは。初めて、「群像」で詩を思いつきり書いていい、つて言われて、それで始めたのが、これ（『とげ抜き 新巣鴨地蔵縁起』）なんですね。

だんだんその、話がずれてきて、詩か詩じゃないか、つてどこにきているんですけれども。

それでこの内容については、読んでいただければわかります。女の苦労を全部書きました。さつき申しあげたように、説経節における苦労っていうのは、昔なりの苦労です。遊女屋に売られたり、人買いに買われたり、海に流されたり、火でたかれたり、いろんな苦労をしてます。それを今のわたしたち、今の女に、置き換えてみる。どんな苦労が、今の女の普遍的な苦労というのかと思うと、やはりそれは、まあ、夫の苦労、親の介護の苦労、それから子の苦労ですわね。この三つの苦が、がつ、がつ、がつ、どう、わたしたちの体に打ちこまれてあるわけですよ。ああ、もう一つ、金の苦労。それらの苦労を書きつくすのが、今どきの説経節ではないか、と思って、取り掛かつたのがこれです。

ですから先ほどの詩か詩じゃないかという話になりますと、そういうわけで、これがわたくしの詩だ、わたくしのこの、自分の境界を超える詩だ、と思つて、構想し、書き始め、つまり、構想していた段階から、一字を書き出すときから、書いている間から、書き終わつたときまで、詩ではないと思つたことは、一度もありません。

ただ、やはり、常識的な人間なものですから、どう見てもこれは詩じゃない風に見えるな、つていうのはわかつております。た。「群像」の編集部の方たちとも、何回もそんな話をしまして。これは詩だと大きく声高に言いますと、本屋で、詩のコーナーに置かれてしまう。それだけは避けたい、とわたしも思いました。なぜか？　詩は売れません。本屋によつては置いてくれません。

「群像」の編集部に「わたしは詩として出したいです」と言いまして。「だけど、本屋さんで、小説のところに置いてもらいうわけにはいきませんかね」って言つたら、「伊藤さんそれは、よくばりですよ。」って（笑）。

でも出す直前まで、悩んでました。長編詩として連載してたんですが、「伊藤さん、本にするときはこれ取りましょよ」つて何度も言われて、実はね、ほとんど納得してたんです。やつ

ぱり先立つものはお金である、と。（笑）

まずお金。じゃあ「詩」と呼ぶのはやめてもいい、と思いか
けたときに、「群像」でこれについて対談させてもらつて、お
相手が津島佑子さん。ふだんから尊敬してやまない方なんです。
そのときに津島さんに、「これは絶対小説じやない」って断言
してもらつたんです。うれしかつたですよ、あのときはほんと
に。尊敬している小説家から、これは小説じやない、つていう
お墨付きをいただいた。その場に、「群像」の編集部のみなさ
んいらっしゃって、やつと、もう、因果を含められた、みたいな感
じで、表紙の、帯のところに、ちいさく、「長編詩」つて書い
てもらえました。それまでわたしは「表に書かなくていいから、
後付のページの、人が読まないようなところでいいから、『実は
詩なんです』つて入れてくれません?』って言つてたんですけど
も（笑）、そんなことやらぬですみました。

それでですね、この選評で、詩じやないという批評を、入沢
康夫さんのほうからいただきました。実はそういうわけで、境
界を超えるか超えないかつていうのが、わたくしの一番関心ご
とでしたから、それを言わされて本望でした。ほんとに。これで
言わなければ、どんな詩人からも、詩だつて受けられるもの
を書いてしまつた、つていうこと、これは汚点でした。こう言つ
ていただいた、きちつとこれは、わたくしの、望むべきところ
にいつたという、ね、これはやつぱりうれしかつたです。

ただ、そこで一抹の不安は、これで、詩じやない、つて詩か
ら言われたら、わたしはじやあどこに行けばいいのか、といいう
(笑)。ほんとに居場所がなくなつてしまつて。実はエッセイで
した、とかね。実は、日記でした、とか。実は、ノンフィクショ
ンでした、とか。それでいいかつて言つたら、やつぱりいやで
すわね。だから、よかつたです。

ほんとに賞をいただいて（笑）。
萩原朔太郎賞。こーんな、ほん
とにこんなね、ほーつとしたこ
となかつたです
ね。自分の居場
所がなくなるか
どうか、つてい
う。



てるつてことを（笑）。高見順賞のときは言われずに、いきなり夜中に電話がかかってたたき起されたもんですから、びっくりして。今回は言われたので、数日間か、猶予期間がありますして、さあ、もしこれで詩じゃない、って言われたらどうしよう、つていう。ほんとにどきどきしてましたので、ありがとうございます。ほんとにうれしかった。首がつながった思いでした。

「道行きして、病者ゆやゆよんと湯田温泉に詣でる事」

で、読まさせていただきます。長いので、四十五分というお時間、ちょっとと出るかもしれません。確かに長いので、ほんとに困つております。

中也祭っていう、山口県に中原中也記念館っていうのがありますし、その中也祭に熊本近代文学館の仲間といっしょに行くなつていう話なんですけれども、オグリさんっていうのが登場人物なんですけれども、オグリっていう名前は、説経節に出てくる小栗（判官）から借りた名前です。前のほうはオグリさんの紹介とか、うちの父がこんなふうにしてよろよろ生きているとか、そういう紹介がずうつとあります。

で、軽（自動車）で、わたいいつも日本に帰つてくると軽借

りるんですね。ジャパレンで軽を安く貸してもらつて、もうジャパレンさんにはいつもお世話を……こんなとこまで来てジャパレンさんの宣伝しなくてもいいんですけど（笑）。そのときもね、中也祭、山口ですから、高速をぶつとばしていくかなくちゃいけないんですが、じゃあ軽で行きましょう、つてことになつて、そんな話をしていたっていうのが、前置きです。

四月二十八日。左折に道なりの右傾に直進して文学館にたどりつくと、オグリさんが待っていました。

ちょっと待つてください、ぼくの車を駐車場に動かして来ますとオグリさんがいました。すぐ裏に私用の駐車場を借りてるんですよ、ツバキが咲いてますけど見にきません？

それでついていきましたら、それは文学館の裏の、人の家の庭先であり、わたしなら自転車でも入れられないような狭さになりましたが、その庭先にツバキの大木が何本もありまして、花がいちめんに、咲いて落ちておりました。むかしイザナミが、人を毎日千人ずつくり殺してやると叫んだ、そしたらイザナギが、なにをいうか、それならこちらも毎日千五百人ずつ生んでやると叫んだ、その応酬にも似た花の咲きようがありました。花期ももう終わりかけで、生み出された花の数はくびり殺された花の数にとうて

いかなわないようありました。オグリさんが慎重に車を振り動かしている間にも、花はみるみるくびり殺されてゆきました。

アンダースローされた灰が蒼ざめて、春の日の夕暮れは静かです。

オグリさんは大きな男なので手足や首を折りたたむようにして助手席にすわり、灰色の軽は高速に乗りました、疾駆しました。照葉樹の雑木林はどうも繁り、ヤマフジが念が残つて仕方がないようにからみついておりました。竹藪はそこここで黄色く立ち呆けていましたし、菜の花の黄色いのも鶯の白いのもクッキリと見えていましたけど、やがて、それも、薄闇の中に見えなくなりました。

じつは脇の下にぐりぐりが出来ましたとオグリさんは話しました。なんだろなど思っていたらどんどん大きくなつてきて医者にいつたらいろいろ検査されてリンパ腺のガンかそれに似た某氏病かもしれない、某氏病というものは某氏が発見した病気で症例も少なく研究も少なく、ガンにそつくりだがそこだけ取れば治るという病気である、ずいぶん待たされて結果がやつと今日知らされるはずだったが、いつてみたら、ようわからんので某医大にまわしました

といわれてまた二週間宙ぶらりんになつた。わかるのは連休明けということになるとオグリさんは、穏やかに、穏やかに、静かに、話しました。ただただ、月の光のヌメランとするままに、従順なのは春の日の夕暮れか。

今まで読んだところにも、一二三か所、中也の詩の引用がございます。わたし、これやつてて、自分の言葉つていうのは、自分の言葉だけじゃなくて、今まで読んだ詩、聞いた声、聞いた歌、見た映画、何から何までこの中に入つてきて、血管なかにも駆け巡つているような気がして、それをこう抽出して埋め込んでいったんですね。あののほうで、中也の声をお借りしました、つて断り書きしてあるんですけども。ですから、中也に詳しい人は、中也の詩じやん、つてわかるところがいくつもございます。

そういうえばやせましたとオグリさんはいいました。食欲はあるし、ただ仕事が忙しいせいかと思つていただけで、先生にきかれるまで不審に思わなかつたですとオグリさんはいいました。

古賀は九州最後のサービスエリアでした。そこでオグリさんと運転をかわるまで、わたしは疾駆しました。ずっと前を見てました。そこからはオグリさんが疾駆しました。

やつぱりわたしは前を見てました。とちゅうで横転した車

を一台見ました。パトカーがきらきらきらしておりました。

宙ぶらりんのまんま、ずっと考えていくちゃならない
というのがたまらないですよ、とオグリさんがぱつりとい
いました。

チャンポンのことや中也のこと親のことや展示のこと、
いろんなことをしゃべりつづけておりましたけど、オグリ
さんもわたしも、死とか無とか苦とか、それから無につい
て、苦について、また死について、考えないではおられま
せんでした。

わたしたちは湯田温泉につきました。十時をまわつてい
たでしょうか。中也祭の関係者、詩人たちはまだみんな料
理屋にいるということで、わたしたちもそこに歩いてゆき
ました。夜が更けてるのにあちこちでは湯屋の水波む音が
きこえ、町角ごとに「足湯」があり、湯気がそこここに
立っていました。料理屋につきましたらみんながいて。あ
らあひさしぶり、太ったんじやない、某はまだ来てないの、
あした来るはずだよなどと嬌声をあげながら、知った顔や
知らない顔やペコペコお辞儀に名刺の交換、そこでふと親
しい詩人がいました。

ホテルの屋上に露天風呂があるよ、消灯はたしか十二時
だけ夜通し入れるみたいだよ。

で、わたしは一時近くにホテルの部屋に帰りました、普
通の西洋風のホテルでわたしの隣がオグリさんの部屋だつ
たのであります、わたしはホテルの浴衣に着替えると抜
き足差し足で屋上の温泉にいきました。女湯には、まだ明
かりがついていました。だれもいませんでした。それは
スリッパのあるなしでわかりました。男湯には何人かがい
ました。それもスリッパのあるなしでわかりました。あの
詩人とそれからオグリさんもいるのかなとわたしは思いま
した。新月の薄ら曇りの夜でした。わたしは温泉の四角い
真つ黒い湯船にするりと入り手足を伸ばしました。お湯は
適度にぬるく肌にからみついてきました。オグリさんの脇
の下や、オグリさんの苦、オグリさんの死や無のことを考
えながら、ぬるい湯に浸かりつつ夜が劫々と更けていくの
を見てました。

中也の誕生日は四月二十九日、中也の生家跡が中原中也
記念館となりまして、毎年の生誕祭には盛大な催しものが
行われます。中也祭であったことについては、ここではなく
わしく語りません。人がたくさん中也の詩の朗読をしまし
た。ホラホラ、これが僕の骨だとか、汚れつちまつた悲し
みにとか、トタンがセンベイ食べてとか。わたしもしまし
た。ながれ、ながれて、ゆくなるか？とか、ある朝、僕は、

空の、中にとか。そのために来たのです。昔からの知り合いや新たに知り合った人たちと話しました。今夜此処でのひとと殷盛り、今夜此処での一と殷盛り、オグリさんも、もちろんいっしょでした。雨が、あがつて、風が吹く。雲が、流れる、月かくす。みなさん、今夜は、春の宵。なまあつたかい、風が吹く。いつしょでしたけど、知り合いの範囲が少しちがうので、かの時、この時、時は、隔つれ、此処と、

彼処と、所は、異れ、同じ場所にいながら別の人たちと話していました。でもわたしはずつとオグリさんことを考えていたのであります。ゆあーんゆよーん。そりやーいろいろなことを想像したのであります。オグリさんの苦。ゆやよん。その死。ゆよん。そして無。ゆやよん。それからあの道を左折して右傾して直進して文学館に行き着いても、あ伊藤さん、と声をかけてくれる人が居なくなるであろうこと。そこで命はポトホトかがり、君と僕との命はかがり。ゆやよん。ゆやよん。

夏はいくらでもかななつて増えました。冬になると、何枚もかななつてかななつて枯れて静かになりました。あれはとても見事でした。人が来るたびに熊本名物といつて連れていった処です。それから寂心さんの樟と呼ばれる八百歳の大木の下にも、わたしは人を連れてゆきました。

翌朝、朝食の席でいっしょにごはんを食べて、いたオグリさんがふと笑い顔をやめて、いいました。

ぐりぐりさわつてみます？

わたしは手を伸ばしました。ゆやよん。オグリさんの持ち上げた脇の下には、きいていたとおりの豆粒のような固いしこりがぐりぐりと、ひとつだけじゃない、二つ、三つ、できていました。

ね、あるでしょ、とオグリさんはいってまた笑い顔をしましたけど、泣き顔のようでもありました。

わたしは前の夜、屋上の温泉から部屋に帰つてたしかめたんです。そしたらやつぱり持つてました。このあいだお詣りにいってもらつてきた、巣鴨の、あの、とげ抜き地蔵の、お守りを。それは「みがわり」といまして、お守りの中でも一番効く。三百円。それで買ってきましたものでした。

そこにもやはりさらさらと、さらさらと流れる水がありておりました。

文学館の裏にあるバショウ林のことをゆやよんと思つておりました。

悪いところにくつづけておくんだよ、そうするとしなし

なつてするからそれを飲んじやうの、と母が申しておりました。

それから話です。

その母に、渡しわすれおりました。

オグリサン。

わたしはオグリさんに呼びかけました。この瞬間わたし
から発する声はすべて呪いがありました。

イイモノ、アゲマス。

スゴク、イイモノ。

わたしは「みがわり」を

財布から取り出して

オグリさんにてのひらにゅやよんと

載せました。

タダメオフダジヤ、ナイデスヨ、レイゲンアラタカナと
げ抜き地蔵ノ、ソノナカデモ、イチバンキキメガ、アルト
イウ、「みがわり」ヲ、コノあたしが、アナタニアゲルノデ、
アリマスヨ、信心シテネ、そうわたしは呪いをこめていい
ました。

帰りはもうひとり、女の友人が同乗しました。

そう思いました。

後ろで水筒に入ってきたコーヒーを飲みながら、なん
だ、これって小栗の

道行きじやん。

今頃気がついたかオグリさん、わたしたちが為したこと
もまさにそれです。返信しましたけど何をかいたか、道行

以下ちょっと中略。長いもんで。まじめな詩人なんで、時間
を守るという氣がありまして。で、中略してて間に、熊本に
帰りつく、そして「わたし」はカリフォルニアに帰ります。そ

ことも。そしたらこんなメールが返つてきました。

▽どうしようもなくて、

▽何処にも出口が見えなくて、そしてじつとしていられ

なくて、

▽闇雲にどつかに駆け出したくて、

▽ただ動くつていうことで救われる

▽ということもあるんだなあという実感でした。

それからしばらく経ちまして。オグリさんのメールがま

た来ました。だいじょうぶでした、某氏病でした、そういう

悲鳴のようなメールが。

みがわりが効きました。呪いもこめました。
そして、この照手。

もう五十になりました。

すっかりみにくくなりまして。ぶよぶよだし、しみもあ

るし、皺も白髪も人に負けたことがないのですが。こう見

えても若いころは何人もの餓鬼阿弥を曳いて歩いたもので

あります。何人も、何人もの餓鬼阿弥を、熊野の湯の峰ま

で連れていき、じやばんと浸けてやりました。そしてそれ

は効きました。まだまだ衰えたもんじやありません。今回

は、熊野の湯の峰のかわりに中原中也の湯田温泉、軽のレ
ンタカーで、為しました。載せられて曳かれていくだけじゃ

どうもありがとうございました。

*本稿は講演録を起こしたものをお伊藤氏に加筆・訂正していただきものです。なお、詩は朗読どおりに表記していますので、一部もとの詩とは異なります。

ない、ときどきオグリの餓鬼阿弥も運転をかわらなければなりませんでしたが、今の時代はしかたのないことですよ。ひばりの鳴き声、とんびの声。かん高い中原中也の歌う声。姫を問うかよやさしやな。車は灰色、車種はたしかダイハツの、「動く」だったと思います。

(「道行きして、病者ゆやゆよんと湯田温泉に詣でる事」
『とげ抜き 新巣鴨地蔵縁起』より)

伊藤 比呂美 (いとう ひろみ)

詩人。小説、エッセイ、絵本、翻訳なども手がける。

東京都板橋区生まれ。青山学院大学文学部卒。

70年代に詩を発表しはじめ、80年代の「女性詩」ブームをリードする。1984年、熊本に移住。1985年に出版したエッセイ『良いおっぱい悪いおっぱい』(冬樹社)がベストセラーに。日本の母親たちの教祖的存在となる。1997年、アメリカ・カリフォルニア州に移住。1999年、小説『ラニーニャ』(新潮社)で第21回野間文芸新人賞受賞。現代詩に復帰して2005年に出版した詩集『河原荒草』(思潮社)で、翌年第36回高見順賞受賞。2007年、詩集『とげ抜き 新巣鴨地蔵縁起』(講談社)で第15回萩原朔太郎賞受賞。